

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
大学院学生研究  
2023年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学研究科	社会学専攻
研究代表者 (2024年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年	栗栖 瑞季	
指導教員	所属部局・職名	氏名	
	社会学部・教授	小池 靖	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ 人文 ・ (社会)	個人・共同の別	(個人) ・ 共同 名
研究課題	存在論的不安の影響にみるスピリチュアリティ信奉の男女比較研究		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2024年3月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名	
	社会学研究科・社会学専攻・後期課程・2年	栗栖 瑞季	
研究期間	2023 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、スピリチュアリティ実践者に40代~50代の女性が多いことに着目し、当事者が実践に関心を持つ状況や背景に「ケアの倫理」が反映されているかを明らかにすることを目的とした。そこで、占い・チャネリング・ヒーリング・代替補完医療といったスピリチュアリティ領域に関心を寄せる人びとを対象として、18名へのインタビュー調査を実施した。調査の結果、20代や男性の当事者は自己への関心をもとにスピリチュアリティ実践に触れていたが、40代~50代女性は癒し・ケアという点に関心を持ち、そこに親密な他者との関係性への視点も含まれていることが分かった。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[スピリチュアリティ] [ケアの倫理] [ジェンダー]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 研究の背景・目的**

日本において「スピリチュアル」という用語は 1980 年代頃に興隆したとされ、例えば占いやタロット、ヒーリング、チャネリング、レイキ、代替補完療法、波動などといった領域は、宗教社会学では多くの場合「スピリチュアリティ spirituality」として扱われる。こうしたスピリチュアリティに関心を向ける層は、特に 40 代～50 代の女性が多いことが先行研究において明らかにされている。女性が二重負担を引き受ける社会状況において、伝統的な女性らしさを肯定しつつ自律的な稼得役割も肯定するスピリチュアリティへ関心が向けられていると考えられる。

これまでの研究では、スピリチュアリティが自己実現といった自己への関心を向けていることから、スピリチュアリティは「ほんとうの自己 authenticity」の達成を目指すような実践であると論じられることが多かった。確かに、筆者がこれまで調査で接してきたスピリチュアリティ実践者においても、実践の動機は病気や離別といった自己の問題や不安が挙げられていた。だが、日本のスピリチュアリティにおいて伝統的な女性像も目指されるならば、「ほんとうの自己」という自律的な道徳的理想だけでなく、他者を支えケア役割を肯定するような道徳的理想の達成も目指されるのではないだろうか。

そこで、心理学者のキャロル・ギリガンが論じた「ケアの倫理」——自己と他者への責任を引き受けることが重視され、他者との関係を通して価値判断が行われる——を踏まえて、本研究では女性たちのケア役割を肯定するようなケアの倫理が、実践者の女性たちの利用動機や問題状況の捉え方、実践の中にどう反映されているかを明らかにしようとした。

**2. 研究方法**

2023 年 6 月から 2024 年 3 月にかけて、スピリチュアリティ実践に関心のある 18 名にインタビュー調査を実施した。調査の対象者は、スピリチュアリティに関心があり実践経験がある人びとである。調査協力者のうち 8 名は、筆者の家族と友人を介したスノーボールサンプリングの形式で協力を依頼した。さらに、10 名はクロス・マーケティング社にリクルート調査を依頼し、スピリチュアリティ実践に関心のある方を募集した。調査協力者は、20 代～60 代の男女である。

インタビュー調査においては、スピリチュアリティに関心を持った背景、それを利用したことでのどのような価値が得られたか、ということについて質問をおこなった。

**3. 研究成果****(1) スピリチュアリティ実践の背景・問題状況の捉え方**

0 さん (50 代女性) は、子どもが自律神経失調症になったり不登校になったりしたタイミングで、代替医療であるホメオパシーの方法を取り入れるようになったという。0 さんが特に現代医学に違和感を持つようになった要因の 1 つには、0 さんが子宮の病気を患った時に、その病院で説明やケアが十分にされなかったことが挙げられている。0 さんがその方法を試すと、体を傷つけることなく症状が緩和したのだという。また、娘の B さんが不登校になった時も、副作用がないとされるホメオパシーの治療薬“レメディ”を服用することでケアをおこなったと話す。

N さん (20 代女性) は元恋人との失恋がきっかけでタロットや占いに興味を持ったという。インターネット上で“復縁”というワードを検索しているうちに、タロットや占星術を発信する SNS のアカウントに出会ったという。N さんはタロットにおいて、元恋人に新しい恋人ができていないか、どうしたら復縁できるかという内容を中心に占い、復縁という目的を達成するための糸口を掴もうとしたと話す。また、悩みを友達には話したことも当然あるが、お金を払うことで後腐れのない第三者に話を聞いてもらいたいという思いもあったという (栗栖 2024 : 50-51)。

K さん (50 代男性) は、数年前に仕事で行き詰ったタイミングでタロットに出会ったという。自分がどのような道を歩めばいいかという自分探しや自己実現が目的だったという。

**(2) スピリチュアリティ実践を通して**

Z さん (50 代女性) は、思春期の子どもとの関係に悩んでいるタイミングで占星術を利用した。占星術の鑑定を通して、悩みや問題にスピリチュアルな意味や理由が与えられたことで、それらに納得し受け入れようと思えたという。

B さん (20 代女性) は、ストーカー被害に遭っている時など、悩みがある状況でスピリチュアリティに関心を持つことが多い。スピリチュアリティによる説明を通して、問題が起きる状況に納得し、精神安定剤のように

**研究成果の概要 (つづき)**

感じたという。

S さん (40 代男性) は、年始や悩みがある時などに四柱推命やタロットなどを利用しており、学生の頃は将来のことや恋愛のことが中心だったが、最近では仕事上の悩みや 1 年の運勢が相談の中心であるという。占いの鑑定を通して、自分が今どのような状況にあり、近い将来どうなるかを知り、日常生活の道しるべとして活用していると語った。

**4. 考察**

インタビュー調査を通して、実践者たちは悩みや不安があるタイミングでスピリチュアリティに出会ったことをきっかけに、実践者たちがスピリチュアリティに関心を持つようになったことが分かった。そして、スピリチュアリティ実践を通して、自分が置かれている状況や自分の状態を知ることができるという点が、スピリチュアリティ領域の魅力として語られた。悩みの種に対してスピリチュアルな意味や説明を与えることが、実践者たちにとっての癒しやケアに導く道しるべとなっていた。

また、母親や妻としてケア役割を担う 40 代～50 代の女性は、家族やペットなどの他者への責任や関係性から切り離すことなく問題を捉えていた。彼女たちにとってスピリチュアリティ実践を行うことは、他者から自律した自己を確立するというよりも、他者との関係を考慮しながら、葛藤状況にある自らの不安や問題の落としどころを見つけていくという営みとして理解することができる。

ところが、結婚や出産、育児、介護などのライフ・イベントを経験していない 20 代～30 代女性の事例では、他者への責任や関係性という観点よりも、むしろ自律的な自己の達成が希求されていた。つまり、スピリチュアリティ実践を通してケアの倫理的な道徳的理想が反映されるのは、ライフ・イベントを経てケア役割を担うような人びとが中心であると考えられる。

また、20 代～50 代の男性 5 名に関しては、全員未婚であることもあって、20 代～30 代女性と同様に自律的な自己の達成が目指されていた。スピリチュアリティ実践を通して癒しやケアを得たいという気持ちもありつつ、女性よりも自己実現といった自己に着目した語りが多い傾向が見られた。

現代的な社会構造や制度において生じる問題が、そこでの倫理観によって十分にケアされてこなかったために、スピリチュアリティ実践が求められているのではないかと考えられる。スピリチュアリティ実践者の男性が少ないことから、男性へのインタビュー調査があまりできていない点が今後の課題である。また、2024 年 3 月に実施した調査については分析が不十分であるため、学会や論文等で発表するためにも継続して分析と考察を進めたい。

**参考文献**

栗栖瑞季, 2024, 「ケアの倫理とスピリチュアリティ——実践者の女性へのインタビューを通して」『立教社会学』立教社会学会, 47-54.

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 栗栖瑞季, 2024, 「ケアの倫理とスピリチュアリティ——実践者の女性へのインタビューを通して」『立教社会学』立教社会学会, 47-54.

④ 日本社会学会「大衆的スピリチュアル実践者の当事者的価値」、第96回日本社会学会大会、立正大学 品川キャンパス、2023年10月8日。